

哲學研究

第四十八號

第五卷
第三冊

美の本質

西田幾多郎

美の本質は何處に求むべきであらうか。名匠の作品や奇しき自然に對しては、何人も其美に打たれない者はない、我々は其物が美であると信ずる。併し美とは或物が青いとか或物が赤いとかいふ意味に於て、物の性質ではない。主觀によつて附與せられた物の性質である。審美的判斷は感情の判斷と考へられる。美の本質は之を審美的鑑賞作用に求むべきであるか。併し藝術家の意識は單なる鑑賞ではない。藝術の本質は寧ろ藝術家の創造作用に於て求むべきであると考へるともできる。且鑑賞作用も一種の創造作用に基くと考へるとも出来るであらう。鑑賞家自身も藝術家の立場に立つて、摸倣的創造作用によつて鑑賞すると考へるともできる。併

し斯く美の本質は之を主觀的作用に於て求むべきである。と考へ得ると共に、我々の審美的判斷に對して客觀的に「美しき物」といふ者があるといふことを考へざるを得ない。美の内容は物の存在的性質ではないとしても、何等かの意味に於て客觀的に美威の對象となるものがある。と考へるとができる。而して此の如き美的對象の客觀的性質を明にする事によつて、美の本質を明にするとができる。と云ひ得るのである。

美は云ふまでもなく物の存在的性質ではない、美感とは物によつて起された主觀的狀態である。併し白の知覺作用其物が白ではない様に、感情其物が美とか醜とかいふのではない。我々何物かを美感するのである、感情の對象となるものが美とか醜とか云はれるのである。無論美しい感情など云はれる時もあるが、かゝる場合には感情其物がまた感情の對象となるのである。美的感情の對象として立つものは物の存在的性質又は關係でないからと云つて、直に主觀的と考へることはできない。例へば數理の如きものは單に思惟の對象であつて客觀的存在ではないが、一般的妥當性を有する客觀的對象と考へねばなるまい。數學者が種々の數理を見出す如く、藝術家も客觀的世界の中に千古尙新なる美を見出し得るのである。數の本質を明にするは、かゝる客觀的對象の性質を明にせぬ。ならぬ様に、美の本質を明にするに

も、その對象の客觀的性質を明にせねばならぬと考へることが出来る。勿論此の如き客觀的對象の性質といふのも主觀的作用の一般的性質に基くと考へることもできるであらう。かゝる對象は我々の主觀一般の構成に過ぎぬと考へることもできる。斯くして矢張り美感の主觀的性質を明にすることが美的對象を明にする所以であると考へることもできる。併し數の如きも純なる思惟の對象として思惟の性質に基くものと考へ得るが、數理的思惟の心理的研究によつて數其物の性質を明にすることはできぬ。數其物の性質を明にするは、數理の據つて立つ所のアプリアオリを明にせねばならぬ。肯定と否定とを交換し得る綜合的作用の對象として數の要素一が成立するといふことは所謂心理的説明ではない、唯數其物の内省的分析によつて可能なるのである。數學的思惟の發達の過程やその心理的條件を明にすることによつて、數其物の性質を明にすることはできぬ。此の如き説明は數其物の説明に對して他律的たるを免れない。それ自身に一般的妥當性を有すると考へられる美の本質の説明についても、同様のことを云ひ得るではなからうか。

ブレンターノの如く對象の内存在性を以て精神作用の特徴となし、作用をその對象の性質によつて區別するといふ考を取るならば、作用の性質を明にするといふこと

は自ら對象の性質を明にするといふこととなるであらう。對象と作用とは一つの體驗の兩面として離すべからざる關係を有すると考へることが出来る。例へば數の要素「一」について位置によつてその性質を變ぜないと云へば、對象としての其性質を言ひ表はすこととなるが、肯定と否定とを交換し得る綜合作用と云へば、その作用の性質を言ひ表はすこととなるであらう。この兩方面は互に離して理解することはできないのみならず、後者が數の成立のアプリオリとして却つてその根本的本質を明にするものと考へることが出来るであらう。美の本質を明にするのも、此の如き意味に於て美の體驗のアプリオリを明にすべきであることと考へることもできる。シムメトリが美であるといふも、單に線の配合として美の性質を帯びるのではない、我々の主觀との關係に於てある。併し此主觀的作用といふのは眼筋の運動といふ如きものではない、カントの反省的判斷作用といふ如き認識對象界以外に領分を有する先驗的作用でなければならぬ、己自身に對象界を構成する内面的作用でなければならぬ。すべて精神現象は意味即實在なるが如く、線のシムメトリ其物が内面的に生きて働く所に美感が生ずるのである。

私は美の對象を數に比べた。併し美の對象と數とは固より同一の性質ではない。

數は單なる判斷の對象であるが、美は價值判斷の對象である、對象其物の中に作用を
 含むと云つてよい。即ち人格的内容を含むのである。此點に於て美の對象は道德
 的對象とその性質を同じくするのである。動機、性格、行爲を離れて道德的判斷のな
 い様に、主觀的狀態や創造作用を離れて審美的判斷はない。自然美の如きも主觀を
 其中に射影するによつて、美の對象となるのである。斯く對象が作用其物である
 といふことが美の對象が主觀的と考へられ、鑑賞や創作の心理的性質に美の本質を
 求むべきである、と考へられる所以であらう。併し道德的判斷と道德的行爲との間
 には離すべからざる内面的關係がある。批判の自我と行爲の自我とは一つの自由
 我でなければならぬ。之れを離れて道德的行爲も良心もない。數の本質を理解す
 るには肯定と否定とを交換する綜合作用を明にせねばならぬ如く、道德の本質を明
 にするは此自由我を明にせねばならぬ。すべての道德的現象は此立場に於て成立
 するのである。而して自由我の立場といふことを、それ自身が時間空間を超越して因
 果的説明を許さぬことを意味して居るのである。審美的價值判斷に就ても同様の
 ことが云ひ得るであらう。その對象となるものは自由我の世界でなければならぬ。
 數理に於て思惟が數の對象界を創造するが如く、自由意志が己自身の對象界を創造

するのである。

美の本質を明にするには美的對象界の據つて立つ所のアプリオリを明にせねばならぬ。此アプリオリを明にするによつて、審美的鑑賞や藝術的創造の本質が明になると共に、美的對象の客觀的意義も明となるのである。之に反し、このアプリオリを離れて、鑑賞や創造の心理的説明に美の本質を求めようとすれば、勢ひ美の外面的説明に陥らざるを得ない。感情移入説の如きも此の缺陷を免れない。又た此のアプリオリを離れて美の客觀的内容を求めようとすれば、生物的生命の如きものを考へるの外はなからう。斯くして獨立の美的對象界といふものは失はれ、美感は快樂の一種に過ぎぬといふことになる。併し快不快といふとは感情を對象化して之を分類せる種屬名に過ぎない、苟もそれ自身に内面的必然を有し、一般的妥當性を要求し得る對象界は、一つのアプリオリによつて成立すると考へねばならぬ。アプリオリとは、自己が自己の反省によつて自己自身の世界を創造し行く如く、自己自身の世界を創造する内面的力である。此世界に於けるすべての現象は、其客觀的なるものも主觀的なるものも、すべて此アプリオリから理解せねばならぬ。一のアプリオリによつて立つ獨立の世界は相即的に對象の方面と作用の方面とを有つて居る、ア

ブリオリは對象と作用との合一點である。ヴントが藝術を個人的心理學の立場から離し、民族心理學の現象として論じようとしたのは、具體的統一の見方といふとはできるが、藝術は單に民族的意識の現象ではなくて、先驗的意識の現象である。無論趣味に争はないといふ如く、藝術的鑑賞の如きも、すべて主觀的、個人的であつて、何等の一般的妥當性を有せないものと考へるともできるであらうが、かゝる考は總て感情を個人の刹那的狀態と考へるより來る推論の結果に過ぎない。直接に物其物について見れば、感情其物が指示的體驗として撰擇性を有するといふこと自身が、既に其物の中に一般妥當的要求を含むとを意味して居るのではなからうか。感情が意識であるといふこと自身が既に超個人的であり、超時空的であるとを含んで居ると思ふ。此物が赤く見えるといふとが事實の意識として客觀的要求を含む如く斯く感ずるといふとも客觀的要求を含み得るのである。感覺的錯覺を校正し得るものは感覺でなければならぬ如く、感情を校正し得るものも亦感情でなければならぬ。感情といふ内面的意識の事實がないといふならば、兎も角、かゝる意識的事實があるとするならば、それは一般的妥當性を要求し得る者でなければならぬ。對象を內在的に含むと考へられる意識現象は一般的妥當的要求を含むと考へられねばならぬ。

時間空間を超越せる一般妥當性の要求といふとは意識成立の條件である。而してかゝる要求の事實的存在といふとは超個人的意識の存立を豫想して居るのである。

二

私は具體的眞實在は自覺的體驗の形式に於て成立つと信ずるものである。自覺に於ては、知るものと知られるものが一である、知る働き其物が自我である、知ることとは働くことである。自己を對象として見れば、種々の作用を超越した不變なる同一者と考へられるであらう。又之に反し内面的には、自己は瞬間より瞬間に移り行く無限なる作用の連続と考へられるであらう。併し自己に於ては此作用と對象とは一でなければならぬ、變ずるものと變ぜざるものとが直に一でなければならぬ。抽象的には作用と對象と分離すると考へることもできるが、具體的經驗に於ては此兩者は離すべからざる内面的關係を有たねばならぬ。而して斯く内面的に對象と作用と結合するといふことは此體驗自身の無限なる發展進行を意味する、即ちその創造的なることを意味するのである。自己の中に自己を寫す自己は無限の進行を含まねばならぬ。靜止する自己は考へられた自己であつて、考へる自己ではない。

我々が色を見るとか、音を聞くとかいふ場合、我々は外界に色とか音とかいふものがあつて、我々の視覚作用とか又は聽覺作用とかによつて之を意識すると考へる。併し視覺聽覺などの作用を離れて、外界の色とか音とかいふものは如何なるものであらうか。物理學的には色や音の種々の説明ができるとしても、色や音の世界は己自身によつて立つ獨立の世界である、物理的説明は之に従はねばならぬ。如何なる物理的説明と雖ども、若し此經驗的事業を説明する能はざる時は、之を變ずるの外はない。それでは色の經驗は何によつて立つか、如何にして獨立の世界を維持するか。赤が青から區別せらるるのは何に由るか、赤が赤自身の中に無限の色合を認めるのは何に由るか。或は之を我々の視覚作用に由ると云ふでもあらう。併し我は毫末も色の關係を動かす力を有たぬ。色は色自身を區別するのである。所謂以物見物のである。赤が青から區別せられるには此兩者の統一がなければならぬ。此統一者は赤となり、青となり共に、赤でもなく、青でもない者でなければならぬ。此統一こそ眞の意味に於ける視覚作用である。白から黒を區別する心は白に非ず、黒に非ず、而も白となり、黒となつて、白から黒を區別するのである。視覚作用とは色が色自身を區別する内面的關係である、色の體驗の據つて立つアブリオリである。總ての

具體的體驗は内容の方面と作用とを有ち、此兩方面は不可分離的である。唯作用の作用、アプリアオリのアプリアオリたる自由意志の立場から、此アプリアオリを反省した時、此等の作用の結合が獨立の對象界を作るのである。所謂自我とはかゝる作用の結合點に過ぎない。我々が色を見るといふのは、色共物が動くのである。對象と作用とを峻別せねばならぬと考へるのは、我々の自我を反省し、之を對象化し、之を中心として種々の作用が之に屬すると考へるが故である。斯く考へれば、限定せられたる自我の作用に對して、對象は全然超越的と考へられるであらう。併し對象化せられた自我の作用といふのは、先驗的作用の限定に過ぎない。精神現象は意味即實在によつて成立するのである、對象共物の内面的關係が精神現象の根柢を成すのである。私が色の經驗について云つたことは、音の經驗についても云ひ得るであらう、其他の經驗についても同様に云ひ得るであらう。我々の經驗界とは此の如き經驗内容の無限なる結合であり、我々の自我とは此の如き作用の無限なる統一である、即ち自我とは作用を内容とする作用である。色が色自身を區別し、音が音自身を區別する内面的統一の統一は作用の作用として自己自身によつて自己を實現する自由なる創造作用でなければならぬ、即ち自由我でなければならぬ。限定せられた或一つの

作用はその内容に對しては無限なる内容の統一となるが、未だ作用其物が直に創造的とは云はれない。眞に主客合一にして、知ることは働くことであり、自己自身によつて無限に創造的なる作用は、作用の作用たる自由我でなければならぬ。之に對して限定せられた有限な作用の内容は單なる可能的關係の世界と考へられるのである。我々の理智によつて盡すことのできない而も動かすべからざる事實の世界は、唯無限なる作用の内面的統一たる自由我の統一によつて成立するのである。

是に於て我々は自由意志の立場から、種々なる對象界を有つと考へることができ、作用が純なれば純なる程その對象界は所謂心理的作用を超越して、それ自身に内面的必然性を有する純なる客觀界となる。視覚作用に對して、色の表象自體といふ如きものが此の如き對象界と考へることができ、作用の有限なる結合の上に立つ世界といへども單なる認識對象の世界たるを免れない、未だ作用の自覺といふものはない。唯無限なる作用の積極的結合たる自由意志の立場に立つ時、我々は無限なる作用の内容の結合より成る單なる客觀界を有すると共に作用の結合自身を對象とする主觀界を有することができる。知即行にして、行即知なる自由の自我は、己自身を對象とすることができるのである。前者は所謂自然現象の世界であり、後

者は所謂意識現象の世界となる。無限なる作用の結合の上に立つ自然界は同じく認識對象の世界ではあるが、純なる作用の上に立つ對象界が必然的意味の世界と考へられるに反して、偶然的事實の世界と考へられる。何となれば我々の意志の奥底は達すべからざる無限の深みである、無限なる作用の系列の極限點である。眞の意志は我々は之を反省し限定することはできぬ、限定せられ得るものは既に意志ではないのである。事實に對する我々の確信は實に此の如き絕對意志の限定の上に立つのである。單なる思惟に於ては此の花は紅ではなくて青であり得るとも考へられるであらう。併し此花の紅なるとは現前の事實である。此事實を定めるものは絕對意志である。フイヒテの云ふ如く理論我の根柢には實踐我がある。感官の證明なるものは絕對意志の統一によつて成立するのである。意志の體驗なき人には實在といふものはない。斯く絕對意志は對象として一方に客觀的事實の世界を對象とすると共に、意志は意志自身を寫すことによつて、主觀的意識の世界を有つ。我々の自我とは絕對意志の摸寫である、無限なる作用の結合である、作用の作用である。此點に於て我々の意識界は自然界と根柢的にその次位を異にして居る。我々自我は自己自身を反省し得ると共に自己自身の對象界を有つ。我々は神の肖像であり

小宇宙である。併し我々の自我は絶対意志が己自身を限定したものに過ぎない。我々の自由は絶対的自由ではない。我々の視覚作用は色が色自身を區別する先驗的作用の一部ではあるが、その全體ではない、我々は色の全體を知ることとはできぬ。先驗的視覚作用の内容たる色自體の體系は、我々の自我に對しては客觀的對象界たるを免れない。主客の對立、精神物體の對立は之によつて生じて來るのである。我々の有限なる自我の作用から見れば、先驗的自我の内容は、何時でも超越的對象界と見做されるのである。

絶対意志は右の如く主觀と客觀との相對立する兩面の對象界を有するのみならず、又己自身の對象界を有つ、即ち主客合一の世界を有つ。これが我々の文化現象の世界である。文化現象の世界は價值實現の世界である。我々の個人的意識自我の歴史について見ると、刻々に生滅して繰返すことのできないと考へられる個々が主觀的と考へられ之に對して幾度も繰返すことのできる個々の作用に共通なる作用の内容が客觀的と考へられるのであるが、知ることが働くことであり、知るものと知られるものと一なる自己の立場から見れば、客觀的と考へられたものも自己同一を離れて存するのではない、それ自身に於て動的なる自我は主觀客觀の合一である。

有限なる我々の意識作用から見れば、先驗的自我の内容の統一によつて成る自然界は、不變なる客觀界とも考へられるであらう。併し絕對自由の自我の立場から見れば、單なる一内容に過ぎない。我々の自我が先驗的自我の立場に近けば近く程、所謂客觀的世界は自我の統一の下に屬する様になる。此處に文化現象の世界が生るのである。文化とは自然を自己の手段とするのではない、自然を自己の中に見ることである。否、自然の奥底に自己を見出すのである。哲學、藝術、道德、宗教の現象は此對象に屬するのである。一つの作用或は作用の有限なる結合の上に立つ對象界は、作用物が創造的でないから、單に客觀界として單なる判斷の對象であるが、無限なる作用の結合たる意志其物の對象は、價值判斷の對象界である。此世界に於ては價值即實在である。批判の自我は行動の自我でなければならぬ。

眞の具體的實在界とは此の如き絕對意志が己自身を發展し行く無限の過程に過ぎない、我々が自己の中に内證し得る自覺的意識はかゝる絕對意志の形式に過ぎない。我々の理性といふのはかゝる絕對意志の否定的方面である。理性は視覺や聽覺などと同列的作用ではない、作用の作用である、理性は人格の中心を成すのである。かゝる作用の對象界として論理、數理の世界が成立するのであるが、絕對意志が自己

自身を肯定して全作用の立場から見ると、向に云つた如く一方に其對象界として自然現象の世界が成立し、一方に作用其物を反省して意識現象の世界が成立すると共に、意志自身の對象界として主客合一の文化現象の世界が成立するのである。其では、かゝる立場からして我々の種々なる精神作用は如何に考ふべきであるか。感覺、表象、記憶、想像、思惟等の作用はかゝる立場から見ると如何なる意味を有し、如何なる關係に於て立つてあらうか。私は前に感覺的內容が據つて立つ所のアプリオリ、例へば色が色自身を區別する内面的關係が我々の感覺作用であると云つたが、我々の表象作用といふのは此の如き感覺作用の結合作用と考ふべきであらう。表象といふのは感覺の單なる結合ではなくして、それ自身のアプリオリの上に立ち、獨自の内容を有する作用である。空間、時間といふのが此作用のアプリオリと考へるとができる。此アプリオリが外に於て知覺的對象界を構成すると共に、内に於て知覺作用となるのである。主觀的なる空間、時間の表象と客觀的なる空間、時間とは異なるものかと考へられるが、後者は前者の對象目的であり、前者は後者の限定せられた者である。思惟作用は又表象を材料として、更にそれ自身のアプリオリの上に立ち、それ自身の内容を有すると考へるとができるであらう。而して單に感覺のアプリオリの上に

立つ感覺内容の世界に於ては、我々が思惟の世界に於て考へる如き客觀界と主觀界との對立及び關係といふものはない。感覺的世界の中心として此世界を維持するものは、恐らく生理學者の所謂反射作用といふ如きものであらう。無論此の如き考へは思惟の世界から見ての説明に過ぎない、感覺の世界は感覺の世界の魂を有つ、之を中心として感覺より直に感覺に轉じ行くのである。種々なる感覺の性質は斯くして内面的に發展し來つたのであらう。表象のアプリオリの上に立つ表象内容の世界についても、同様のとが云ひ得るであらう。而して此世界の中心として之を動かすものは本能に基づく自動運動とかいふ如きものであらう。我々の知覺は總て衝動的である。純粹知覺の世界に於ては、我々は衝動的に知覺から知覺に移り行くのである。藝術家の空間といふ如きものは此の如き世界を構成する本能的綜合の範疇と考へるともできるであらう。我々が今日實在界と稱するものは、云ふまでもなく思惟内容の世界であつて、此世界の中心として之を維持するものは我々の意志である。斯くそれぞれの表象は思惟の中に世界を構成する作用の作用たる絶對意志の立場に於て結合せられ、感覺は表象の中に包容せられて、此等の世界を貫通する人格的發展の世界を生じ來るのである。此世界に於て我々の生命といふものが考へ

られ、歴史といふ者が考へられるのである。生物的現象は此上に現れ來るのである。私は以上述べた如き絶對意志の立場に於て作用と作用との直接の結合が我々の感情の意識であつて、此立場の上に立つ對象界が藝術の對象界となると思ふ。此處に客觀的存在界を超越し、それ自身に於て創造的なる美の世界がある。何となれば客觀的存在界は却つて作用の結合に依存するが故である。作用と作用との直接の結合、意味即實在が意識の根本義であつて、此處に純なる人間性がある。此の如き意識成立の根本作用が藝術的意識作用であつて、すべて純なる人間性が藝術意識の内容となる。「純粹に人間の」といふものを離れて、藝術的といふものがあるのではない。藝術のアプリオリは純粹意識のアプリオリである。藝術の本能の理解は此處に求められなければならぬ。

III

心理學者は感情を大まかに知識と同列的なる精神要素となし、感情の性質は快と不快との兩方向のみであつて、種々の感情の性質的區別は之に伴ふ知的要素の性質に基くものと考へて居る。併し私は感情といふのは精神現象の一方面といふ如き

者ではなくして、寧ろ意識成立の根本的條件ではないかと思ふ。我々の精神現象の物體現象と異なる所以は意味即實在にして、作用と作用との内面的結合にあるとすれば、かゝる結合の状態が具體的感情であつてかゝる結合の内容が感情の眞の内容ではないかと思ふ。青から赤を區別するものは青でもなければ赤でもない而も青となり赤となつて此兩者の關係を成立せしめる者でなければならぬ。青と赤がかゝる内面的關係に入込むのが我々の意識作用である。色が色自身を區別するのが我々の視覺作用であり、音が音自身を區別するのが我々の聽覺作用である。我々は此作用を知識と同意義に於て之を對象化するとはできぬ。我々は視るとを視るとはできない、聽くとを聽くとはできない。併し此の如き内面的統一がなければ、青から赤を區別するとはできない、而も意識に於ては統一其物が實在でなければならぬ。我々が之を反省して見た時、其内容はすべて認識對象界に入り、作用の内容としては何物も残らない、唯作用と作用との結合の形式的性質として快と不快との相反する兩方向が考へられるのみであらう。心理學に於ては作用といふ語すら無用と考へることも出来る。併しそれ自身に於て何等の内容なき者は他を結合するとはできない、且つ意識現象に於ては、綜合的全體が實在性を有し、要素は却つて抽象的と

考へられねばならぬのである。知識の内容が感情の性質を定めるのではなく、知識は感情の中にあるのである。知識内容の新なる結合は其根柢に於て新なる感情の内容の發生を意味して居るのである。何となれば作用と作用との結合の上に、認識對象界に於ける知識内容の結合が可能となるからである。新なる知識の内容を創造するものは智識ではなくして感情である即ち意識の動的內容である。ベルグソンの云ふ如く我々の知識は *une nébulosité vague* の中に輝く核である。全體の性質は之を構成する要素の性質の結合より成るのではなく、要素に對して不盡根的である。

私は感情を右の如く考へるから、純なる感情は即ち純なる意識であつて、感情の中に特種なる藝術的意識とか感情とかいふものがあるのではない。純なる感情、純なる意識はすべて藝術的であると思ふ。感覺的內容は單に感覺的內容として美なるのではない。色が色自身を區別する純なる作用として、絶對意志の立場、人格的立場に於て、直接に相結合する時即ち我々が純粹視覺の立場に立つ時、色は忽ち生命を得、それ自身に於て生きたる色となる、即ち藝術的對象となるのである。我々が全身眼となり、耳となる時、感情が物に移入せられ、その表出運動として自ら藝術的動作を伴ひ來るのである。心理學者が感覺の強度と稱する者が、既に作用の直接結合に於け

る關係を示す者である。感覺は内面的統一に於て一つの力となるのである。線の配合美などいふことも線が日々生きた作用として立ち、直接に相結合することによつて美感を生ずるのである。此立場に於ては如何なるものも美ならざるものはない。肉慾罪惡も之を美化することができる。Arthur Symons の云ふ如く人體に於て誰も胸の美を見るが肩胛骨の美を見るものはない。自然に於て誰も曙のアルプスの美を見るが腐水の沼の美を見る人は少い。併し此等はすべて同一なる本質的美の異なれる形に過ぎない。(Arthur Symons, *Studies in Seven Arts*, P. 29)

右に云つた如く感情は其純なる状態に於てはすべて美である。喜も悲もそれぞれの美を具へざるはない。恰も我々の空間的表象が空間のアプリオリによつて成立する如く、作用と作用との結合たる藝術的意識のアプリオリによつて我々の感情が成立するのであると云つてよい。快不快とは前にも云つた如く感情を反省して、相反せる二種の性質に分類するに過ぎない。併しそれでは非藝術的なる感情といふものはないか、不純なる感情とは如何なるものであるか、快不快といふのはたんなる名目ではなく、かゝる感情のあることを否定することはできぬと云ひ得るであらう。併し私は自己の利害を中心とする快不快の感情といふ如きものは、純なる感

情の立場の中に他の立場の混入することによつて生ずる混合物であると思ふ。純粹思惟の立場に對して他の立場の混入し來る時我々の思惟は誤謬に陥る如く我々の純なる感情が意志の立場より混亂せられた時感情は其自身の純なる内容を失つて無内容なる不快の感情となる、即ち感情が他律的となるのである。すべて意識作用の他律性とは意識作用がその固有の内容を失ふとである、對象と作用との乖離である。心理學者が意識内容を總て智識に移すのと感情を單に快不快となすのは一の考である。例へば貪欲といふとは非藝術的な感情である。併し守錢奴は藝術の對象となすことができる。此場合に於ては貪欲といふものが純なる作用として見られるのである、純なる一つの人間性として見られるのである。その知的内容が一々作用として直に結合し居るのである之を構成する知的内容が作用の中に含まれて居るのである。之に反し此情緒が非藝術的な欲望となる時此感情はもはや純なる作用として見られるのではなく知識の對象界に移されて他の立場から見られるのである即ち意志の内容となるのである、絕對意志の對象界たる實在界から見られるのである。作用を認識對象界に移して見るといふには二義あるであらう。一つは我々を全然對象化して見るとである。斯くすれば作用の意義は全く失はれるの

である。一つは主觀と客觀との對立を存じながら、客觀界を作用實現の場所と見るのである。我々の自我の内容即ち純粹感情の内容が、絶對意志の要求から自己を絶對意志の對象界に移した時、即ち歴史化しようとする時、自我の内容即ち感情の内容は轉じて欲求の内容となるのである。斯く感情の動的內容が欲求に移されたる時、感情は無內容なる快不快と考へられるのである。不純なる非藝術的感情と考へられるものは、盡く眞の感情の形が歪められて欲求の形を成すものである。肉欲的感情が非藝術的と考へられるのは、その最能く欲求の形に轉じ易きが故である。

感情の内容を反省して之を認識對象界に寫して見る時、其構成的要素は盡く知的内容に還元せられ、其綜合的統一欲求の内容に移されて、感情其物の内容は失はれてしまふ。斯くして感情の性質は單に快と不快とに分たる。併し感情は分析することのできない己自身の深い内容を有つ。ベルグソンの云ふ如く我々が甲點より乙點に手を動かす時、之を内から見れば分つべからざる單なる一つの作用である。併し之を外から見れば、甲より乙に至る曲線である。我々は之を無限の位置に分ち、線を此等の位置の相互の整列として定義することはできるであらう。併し手の運動其物は單に位置や順序ではない、それ以上の或物を有つ、即ち動き *la mobilité* である。

此動きは機械論的に無数の點と點との結合の必然的結果して生ずるのでもなく、又目的論的に初め一つの目的を定め、之によつて無数の點と點を結合したものである。い單に無限なる作用と作用との内面的結合である。否全體が不可分離なる一つの作用である。位置も此等を結合する順序も此一作用を基として考へ得るのである。藝術の對象となるものは、生命の流ともいふべき此の如き創造作用の内容でなければならぬ、即ち「時」の内容でなければならぬ。ロダンが *le sein* の聳しき白鳥の無智を罵るに對して、*Il s'ont celle (intelligence) des lignes et cela suffit!* と云つたといふが、線の智識とは此の如き内容の智識でなければならぬ。フェヒネルは聯想によつて美感を説明するも、欲求の立場に於ける快感が如何に積み重ねられても、美感となるとはできぬ。恰も有理數から無理數のできないのと同様である。靜物畫に於けるオレンジの美は以太利の天を聯想せられるに由るのではなくして、ベルグソンが薔薇の花の中に過去の記憶をかぐと云ふ如く、黄金色のオレンジの中に以太利の天が見られなければならぬ。物の合目的性が物の美を助けるといふも、未開人が器具を自己の身體の一部と考へると云はれる如く、物の中には我々の生命の血が通ふものとして、器具の目的其物が藝術美の一部を成すのである。我々の情緒は複合物の様に考へられる

が喜も唯一なる自我の現在の喜であり、悲も唯一なる自我の現在の悲である。情緒に於ては過去の記憶も、現在の感覺も、表出運動も直に一でなければならぬ。過去の聯想が美の重要な要素と考へられるのは、我々が之によつて現在の意識の奥底に、現在を超越した深き意識の流に接するが故である。此意識の流に於ては、過去は純なる作用として今も尙生きて居るのである。此流に入るとは我々に於て深き純なる意識の發生であり、大なる生命の創造である。嬉しかりし事も、悲しかりし事も、懐しい思出となりては、總てが美化せられるのも此故である。過去の喜の單なる思出は誇にすぎない、過去の悲の單なる思出は怨恨にあらざれば、今の幸を思ふ喜に過ぎない。單なる思出は何等の藝術的意義を有せないのである。オレンジの色香を通じて、以太利の天を見、薔薇の中に過去の記憶をかぐのは、唯我々が現在意識の底に入つて、純なる作用の深き流に結合するによつて可能となるのである。物體現象にては、「時」は獨立變數であり、我々の精神現象も心理學的に考へられれば、「時」は獨立變數に過ぎないが、眞に直接なる具體的精神現象に於ては、「時」は内容を有ち、「時」は内容によつて變ずるのである。審美的鑑賞我は單なる記憶我ではない、ハルトマンの云ふ如く美の實感は單なる實感ではないのである。現今多くの美學者は感情移入によつ

て美的對象の成立を説くが、感情移入といふのは、單に内面的模倣によつて我々の感情が認識對象界に結合するといふ意味ならば、聯想の場合と擇ぶ所なく、何故に認識對象界がその性質を變じて藝術的對象界となるかを理解することはできぬ。私に他の表出運動に同感するのは、我と彼とが純粹意識の立場に於て結合するのである。我の作用と彼の作用とが直に結合するのである、否、我と彼と未分以前の自我を見るのである。自然的因果律の支配を脱して精神的因果律による自他合一の意識が内面的に發生するのである。斯くして感情移入によつて單なる表出運動が認識對象と異なつた意味を有つて來ることが分る。單に自己の價値感情を客觀化するとか、射影するとかいふのみでは、感情がその所有者を換へたといふに過ぎない。(未完)